

## 理趣經法の哲學的考察

八 田 幸 雄

に五秘密の眞言を以下に述べてその特質を論じよう。

### 二

大樂軌、略出軌、普賢軌では

(四) 方 箭 jah vajra-dṛṣṭi sayake mata.

喜悅 hūm Vajra-keḷikili hūm.

金剛愛 vani vajra-nismara rata.

欲自在 hoḥ vajra-kāme śvāri tañ.

(四隅内供) 妙適悅 he vajra-rati

適悅性 mahā-rata-vajri hoḥ

金剛眼 oñi vajra-locane.

大吉祥 mahā-grī-vajri hoḥ

(四隅外供) 喜 he rati-vajra-vilasini trati.

笑 he rati-vajra-hase haha.

歌 he rati-vajra-gite tete.

舞 he rati-vajra-nṛite bepa bepa.

(四) 門 鉤 vajraṅkuṣa jah

一 理趣法の組織構造を考察することにより理趣法はどのような意味をもっているのか、そして理趣經の精神がどのように促えられているかを明かにしたい。そこで先づ金剛界法及び十八道法の次第と比較してみるに、それは十八道を母體として十種の印言を加えた金剛界十種別行立の組織になつており、一法界蘇哩耶法の道場觀(五秘密の道場觀)、十七段印言の添加、更には念誦法における智拳印、大惠刀、極喜三昧耶等の印言を除けば全く金剛界法と異るところはない。故に以上の相違点のみでは理趣法がもつ特質を宣揚することは困難である。そこでこの理趣法が構成される基礎となつた大樂軌並にこれと軌を一にする略出軌、普賢軌、瑜伽念誦軌や、理趣會軌、五秘密軌等を比較對照しこれ等の儀軌の主眼点について考察しようとするのである。特に漢譯音寫眞言を梵語に還元し、その主要部分である金剛薩埵十七尊の眞言並

索 vajra-pāca hām.  
鎖 vajra-cakle vani.  
鈴 vajra-gaṇṭhī hoh.

となつてゐる。次に瑜伽念誦儀軌(6)を見るに初に四門、次に四隅外供、四隅内供、四方菩薩の印言となり四迎内供を除きその眞言は大樂軌と同じである。

(四隅内供) 雲金剛 om megha-vajri ruro ruro  
春金剛 om madhu-Vajri om om.  
秋金剛 om carad-vajri am am  
金剛雲 om vajra-geḥri hām hām.

となつてゐる。そこでこの大樂軌の眞言を法賢譯の七卷理趣經(6)に説かれてゐる眞言と對照するに全く同じである。ただ瑜伽念誦軌の四隅内供の眞言の異なるのは西藏譯の系統に基くからであり、それはともに金剛薩埵等の十七尊をもつて大樂の世界を象徴しようとするものである。金剛薩埵とそれをとるまく欲觸愛慢の四菩薩は絶對空を體得せる主體の無限の喜びの世界であり、春夏秋冬の四菩薩は四時を通じて變らぬ樂しみを、喜笑歌舞の四菩薩も大樂の境地を示したものである。この精神は理趣經初段の立場を明かにしたものであつて、この絶對空の體驗に基く主體の眞實智の體得はこの喜びの世界を一切衆生に與えんとの大悲發現となり、理趣經十七段の五祕密の精神に相通するのである。而してそれは又金剛界五智

を示す五佛の精神にも通するのである。  
次に理趣會軌の内容を考察するに

(四門) 色 om vajra-rūpa jah

聲 om vajra-gabdha hām.

香 om vajra-gaṇḍha vani.

味 om vajra-rasa hoh

(四方) 意生金剛 om manodhava vajra jah

ケリキラ om vajra-keikila hām

金剛忿 om sneha-vajra vani

金剛慢 om vajra-garva hoh

(四隅内供) 意生女 om manodhava-vajrini he

觸女 om vajra-keikili hām.

愛結女 om sneha-vajrini ha

自在主女 om vajra-garve hām

(四隅外供) 春 om madhu-vajri om om

夏 om vajra-megha tata

秋 om carad vajri ah ah

冬 om vajra geḥri ah ah

となつており四方の四親近菩薩は藏譯廣經所説のマンダラの四菩薩の名と同じであり、四隅内供はその女尊で示し、四隅外供は藏譯七卷理趣經のそれと同じである。この理趣會軌の立場は廣經成立の時代には未だ形成されていなかつた金剛薩埵十七尊(大樂の世界)と理趣經初段の十七清淨の句の思想

とが統合されてくるのである。十七清淨の句は理趣經が主眼とする八大菩薩で象徴したところの絶対智の働きにより、有限な自己の殻がうちくたかれ、主體の般若の空體驗が永遠なる世界と交り一如となるこの永遠なる實在の世界の證得は自他の區別、生死の世界を遠離し、高次の自覺體驗に基く絶対平等性の立場からは煩惱即菩提となり、その立場からは逆説的に煩惱の極致をもつて悟りの究極が象徴される。それが十七清淨の句であるがこの世界は前述の大樂軌が求めた金剛薩埵十七尊の世界と本質的に異なることなく、ここにこの兩思想が統合されて十七清淨の句に金剛薩埵十七尊の種子が配當されるのである。その種子をつなぐと、《om maha sukha vajra sattva jah hūm vahn hoh sātās tvah》となり大樂の世界を象徴する極喜三昧耶の眞言となり、理趣經の究極の境地を示すことになる。これをマンダラに構成すると仁和寺の理趣會マンダラとなる。而して金剛薩埵の欲觸愛慢の世界は究極には初會の金剛頂經を所依とする金剛界マンダラの世界と變りないとの考えから、補陀洛院版のマンダラが、更には宗叡請來のマンダラは全く金剛界理趣會の形式をもつて構成されているところよりみてもわかる。

次に五秘密軌を参照するに五秘密三昧耶印は、

金剛薩埵 *suratās tvah.*

欲 *jah vajra-dīpti sayake mata*

ケリキラ *hūm vajra-keikili hūm.*  
愛 *vahn vajra-nismara rata.*  
慢 *hoh vajra-kamecvari tani.*

となり大樂軌等の四親近の眞言と同一である。そしてこの五秘密軌の最後には同一月輪同一蓮華中の五秘密は大日の四徳である大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智を開かんとする阿闍、寶生、彌陀、不空成就の四佛の世界に通ずることが記されている。このように一切に大樂の世界を與えんとする五秘密の大悲發現は有限なる自己存在を絶対否定する大智の働きに轉換され、ここに無限の大樂の世界を味わさんとする理趣經初段に通ずるのである。故にこの五秘密の世界も究極において金剛薩埵十七尊の世界と本質に於いて異なることなく、更には十七清淨の世界とも同一と見做されてくる。道寶所傳のマンダラはかかる思想の上に構成されたと思われる。

### 三

さてここで三儀軌を考察するに大樂の世界も五秘密の世界もともに大智は大悲に、大悲は大智に轉換しこの兩者の融即せる世界に理趣經の主眼とする大樂の世界は存するのである。而してこれ等の事を考えたと現行の理趣法に一法界蘇哩耶法と五秘密法の二系統のあることも理解される。前者は理智不二の絶対智の立場から一切はその象徴たる法身大日の

Van 字に歸結し、現存在の主體が無限の大智の光を得て自性清淨なる心蓮を開き愛智融即の立場から大悲救濟の世界を體現せんとするにあり、後者は大悲發現の立場から四智の世界を開示し大智證得の世界に至らんとするのである。この理趣經初段の大樂と十七段の五祕密の大悲大智一體の世界は般若空觀をその思想根底とする理趣經がそのゆきつく所、金剛頂經の究極の思想と結びあい、金剛頂經の思想的展開が理趣經となり、ここに理趣法が金剛界別行立の形式の上に存することも哲學的に論證出来るのではないかと思われる。

次に理趣法に十七段の印言を附するのは理趣經の精神を十七の印言に約して觀するものであるがその内容は第十三回學術大會に於て理趣經マンダラの構造と題し發表したので印度學佛教學研究第十一卷第二號一八八頁を参照されたい。

さて大樂の世界といひ五祕密の世界といひ又理趣經の根本精神の體得といひ、その理念の實現は有限な自己存在を否定克服することによつてのみ到達出来るのである。その證得が各々の次第の實修においてなされるのであり、結界法、勸請法、結護法等皆、有限な自己存在を自覺し自我の世界を克服し、自性清淨心を開示する以外の何ものでもない。殊に降三世の印は全く佛と衆生の相反する立場を結びつけ、西田博士の言われる絕對矛盾の自己同一の在り方を想起させるのである。かくして自性清淨心は念誦法における入我々入觀(身密

の相應)、大惠刀(般若教理の究極の世界)、極喜三昧耶(大樂の世界)、更には正念誦(口密の相應)、字輪觀(意密の相應)となり永遠なる世界との交りの中に高次の宗教體驗を證得するにある。

一般に祕密儀軌はこのように事作を通じ、その眞言を唱え自己の心を啓發しながら次第に有限性を自覺し絕對否定の精神を體得し、永遠なるものとの交りを證得せんとするにあるが、このような儀軌の内容を掘り下げることにより様々な思想が醸成されており、深い哲學思想が存することに氣づくのである。かかる立場に立つて經典を見直し、又經典の思想から儀軌を見直して實修することは、自らの宗教體驗を豊かにすると同時に經典の象徴する本質的精神に肉迫することが出来ると思われる。そしてこの理趣法は大樂と五祕密の世界證得を究極の理想としながら、現存在の主體に絕對否定の聖なる否みを投げかけ煩惱具足の衆生の宗教的實存が即身に淨土を現證することを教えている。それは理趣經十二段有情加持の法門に通じ、而して自己の有限をくだき淨土を現證することとは流轉に住著し、大精進をもつて常に生死に處し一切を救攝し利益し安樂ならしめる。大乘菩薩道に生きることなのである。

1 宮野有智編の理趣經法(金剛界)を中心に考察を進める。

2 金剛界及び十八道の次第は梅尾祥雲博士祕密事相研究四九頁

理趣經法の哲學的考察(八田)

並五五頁以下参照。

- 3 大樂軌は大正20(一一一九)五〇九頁以下、略出軌は大正20(一一二〇)五一三頁以下、普賢軌は大正20(一一二三)五二八頁以下、瑜伽念誦軌は大正20(一一二四)五三一頁以下、理趣會軌は大正20(一一二二)五二四頁以下、五祕密軌は大正20(一一二五)五三五頁以下
  - 4 大樂軌は大正20五一〇頁以下、略出軌は同五一五頁以下、普賢軌は五二九頁以下
  - 5 大正20五三三頁以下
  - 6 最上根本大樂金剛不空三昧大教王經、大正8、七九九頁
  - 7 梅尾祥雲博士、理趣經の研究、一三五—一三六頁参照
  - 8 五祕密軌の最後に五智を生ずることが説かれている事。又この大樂軌等には五佛灌頂、四佛繫蔓の眞言がある。
  - 9 大正20五二七頁以下
  - 10 梅尾祥雲博士、理趣經の研究、第十三圖参照
  - 11 大正圖、5、六九五頁
  - 12 梅尾祥雲博士、理趣經の研究第十四圖、第十五圖
  - 13 大正20五三七頁
  - 14 梅尾祥雲博士、理趣經の研究第六八圖
  - 15 三井英光氏、加持祈禱の原理と實修四六頁によれば、後世に附加したもので重要でないなどの意見もあるが、修法としてはそうかも知れぬが、教理を理解する上には大切なように思われる。
- 16 理趣經、大正8七八六頁上

新刊紹介(2)

佐藤密雄

「原始佛教教團の研究」

第一章 序説

第二章 出家と比丘

第三章 比丘の入團と依止

第四章 僧伽の組織

第五章 僧伽の諍事と滅諍

第六章 僧伽に於ける懲罰羯磨

第七章 戒經と安居・布薩

第八章 律制と淨法

第九章 佛教の衣制

第十章 提婆の破僧と第一結集

附録 フラウワルナー氏作製の古健度について

A5本文八七九頁 索引二三頁

山喜房佛書林刊

定價 三、〇〇〇圓